様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 5 日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010 ～ 2012
課題番号：22520466
研究課題名（和文）日系人日本語変種の成立過程に関する言語生態論的研究

研究課題名（英文）Ecolinguistic study of the development of *Nikkei* varieties of Japanese

研究代表者
渋谷　勝己（SHIBUYA　KATSUMI）
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90206152

研究成果の概要（和文）：
本研究課題は、明治以降、南米や北米にわたった日本人の子孫（日系人）が使用する日本語（日系人日本語変種）の特徴を探ることを目的とし、主に、次の３つの作業を行った。
(1) 日本語談話データと関係資料の収集。主にブラジルとカナダにおいてフィールドワークを実施し、日系人の日本語談話および関係資料を多数収集した。
(2) 日系人日本語変種の文法記述。談話データと面接調査の結果にもとづいて、日系人日本語変種のいくつかの言語事象の記述を行った。
(3) 各地日系人日本語変種間の比較とその成立要因の解明。上記言語事象について、各地の日系人日本語変種の分析結果をつきあわせ、日系人日本語変種間の異同を確認する作業を行った。また、各変種間で相違点が確認された言語事象について、それがなぜ違っているのかを解明すべく、検討を加えた。

研究成果の概要（英文）：
This project aims to elucidate the characteristics of the varieties of Japanese spoken by descendants of Japanese who immigrated to the Americas from the Meiji era to the end of World War II and conducted the following researches:
(1) Through the fieldwork in Brazil and Canada, authentic discourse data of and written documents on Nikkei people have been collected and compiled.
(2) Based on these data, some linguistic features of immigrant varieties of Japanese have been described.
(3) Based on these descriptions, similarities and differences among the varieties of immigrant Japanese have been pointed out and the factors which brought about the differences have been detected.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：日本語学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：日系人日本語変種、移民、言語接触、言語習得、言語融合、方言維持

１．研究開始当初の背景

現代社会においては、人々の国を超えての移動が日常化し、それにともなって、世界各地で異なった言語を話す人々が接触するという状況が頻繁に生じている。そしてその言語接触の現場では、さまざまな言語問題や社会問題も同時に生じている。

言語接触を経験する言語ということでは、日本語もその例外ではない。現代の日本語社会では、さまざまな方言を話す人々が移住や転勤等によって他の方言話者との接触を経験しているが、海外に長期にわたって滞在して現地の言語と接触しているケースも多い。逆に、日本語を学ぶ多くの日本語非母語話者（日本語学習者）が、日本語および日本語母語話者と接触しているという実態もある。

その他、かつても海外に移住した日本人が数多くおり、その子孫（日系人）はいまでも日本語を維持して、現地のことばとの二重言語生活を営んでいるというケースもある。

本プロジェクトは、これらの日本語が関与する言語接触事象のなかから、海外に移住した日本人の子孫（日系人）の話す日本語変種にスポットライトを当てて、そこで使用される日本語の特徴と、そのような日本語が生じるにいたったプロセスを明らかにすることを目的として立ち上げた。研究代表者・研究分担者がこれまで地域ごとに個別に行ってきた日系人の日本語変種の記述的な研究をさらに推進するとともに、その成果を、言語生態学（ecolinguistics）および接触言語学（contact linguistics）の枠のなかで統一的な視点をもってつきあわせ、この段階での可能なかぎりの総合化を行って、将来の発展的な研究を行ううえでの問題のありかを整理することを試みるものである。

日系人の日本語変種は明治以降、現在に至るまで、100年以上をかけて形成されてきたもので、その形成過程においては、さまざまな言語問題や社会問題も生じている。異言語と接触する機会が格段に増えている日本語の、今後の状況を予測するためにも、日系人の日本語変種を取り上げることには意味がある。

２．研究の目的

研究期間内での達成目標は、次の３点であった。

(1) 包括的な記述の提示。本プロジェクト参加者が、特定領域研究（A）（2）「環太平洋地域に残存する日本語の調査研究」（2000～2002年度、課題番号12039225、渋谷）や、大阪大学21世紀COE「インターフェースの人文学」（2002～2006、工藤）において行った、海外に居住する日系人が使用する日本語変種の記述を、さらに包括的に展開する。具体的には、南米（ブラジル・ボリビア）や北米（カナダ）、ミクロネシア（パラオ）でフィールドワークを行いつつ、できるだけ多くの自然談話データを蓄積し（documentation）、現地で日系人が使用する日本語の音声・文法（ヴォイス・アスペクト・テンス・モダリティなど）・言語行動（発話行為・ポライトネスなど）等について、各地の日系人日本語変種の特徴を相互に比較可能なかたちにする枠を構築しつつ、記述作業を推進する。

(2) 各日系人日本語変種間の異同の確認。各地で個別に行った記述の結果をつきあわせ、日系人日本語変種間の異同を確認する。とくに、日本語の方言要素の維持の度合いや、日本語共通語の混入の度合い、現地の言語から受けた影響の度合い、さらには当該日本語変種で独自に行われた再構造化（restructuring）などに注目しつつ、その異同を明らかにする。なお、(2) 項に記載した３地域４地点を選んだのは、プロジェクト参加者に一定の研究の蓄積があるということのほかに、これらの地域の社会的・言語的環境（ecology）に違いがあるということを考慮してのことである。

(3) 各日系人日本語変種の形成要因の解明。それぞれの日本語変種の特徴をもたらした、社会的要因（集団の人口、集住度、社会的ネットワークなど）や、社会言語的要因（移住者の母方言とその話者数、日本語の使用目的と頻度など）、心理言語的要因（一人の話者のなかに併存する複数の言語の相互影響のありかたなど）などを明らかにする。

３．研究の方法

以下の方法によって研究を実施した。

(1) データの蓄積と記述。アメリカ西海岸（研究分担者工藤）、ブラジル・ボリビア（研究協力者白岩広行）、カナダ（研究分担者高木）に赴き、各フィールドにおいて以下の調査を行った（なお、当初計画していたパラオの調査については、カナダの資料が少ないことからカナダでの調査を優先し、断念した）。

① できるだけ多くの、また多様な自然談話を収録した。

② ヴォイス、アスペクト・テンス、モダリティ等の文法カテゴリを中心に、できるだけ多くの言語事象について調査し、記述を行った。その際、話者の内省が得られる場合には、工藤が作成したアスペクト・テンスの調査票（工藤編『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系―標準語研究を超えて―』付録CD）、

あるいは渋谷と高木が参加して作成した『方言文法調査ガイドブック』(国立国語研究所)等の調査項目をベースにし、それに、例文の適格性判断、例文作成の依頼など、複数の方法を併用して調査を行った。また、内省が得にくい場合には、話題を操作するなどして、自然談話のなかでさまざまな文法カテゴリを構成する形式を引き出せるように留意して、調査・記述を進めた。

③ 日本語変種間の異同をもたらした要因の解明という目的を達成するために、インフォーマントの過去の経験談(ナラティヴ)や、居住地の社会・経済情報、さらには歴史的な資料などを可能なかぎり広く収集した。

(2)各地日系人日本語変種間の比較とその成立要因の解明。定期的に報告会を開催し、分析結果をもちよって、各地域の日系人日本語変種間の異同を、それぞれの言語事象ごとに細かく確認する作業を行った。また、各変種間で相違点が確認された言語事象については、それがなぜ違っているのかを、上記(1)③記載の現地で得られたインフォーマントの経験談や資料などをもとにして解明することを試みた。その際、Mufwene.S.(2000) *The Ecology of Language Evolution.* で示された言語生態といった視点と分析枠や、Thomason,S. & T.Kaufman (1988) *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics.*、Clyne,M. (2003) *Dynamics of Language Contact.* などで提示、紹介されている言語接触・言語変容モデルの妥当性をあらためて検討し、各日系人日本語変種の成立過程を示すのに適当なモデルを構築することを試みた。

４．研究成果

研究成果は、下記５項に示す論文、口頭発表のほか、冊子体の報告書『日系人日本語変種の成立過程に関する言語生態論的研究』(渋谷編)を作成し、公開した。本報告書には、以下の論文と資料を収録している。

・展望論文
　・日系人日本語変種研究の潮流－文法事象を中心に－(渋谷勝己)
・研究論文
　・日系人と日本語変種―ウチナーヤマトゥグチとの比較を中心に―(工藤真由美)
　・談話資料からみる日系カナダ人３世の会話スタイル(高木千恵)
　・ブラジル日系社会における方言接触―否定形式・存在動詞・アスペクト形式に注目して―(白岩広行)
・資料
　・談話資料(ブラジル)
　・日系人日本語変種研究文献一覧

現在、本研究の成果を公開するためのホームページを準備中である。上記報告書もこのページで公開する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計１０件)

① 渋谷勝己、多言語・多変種能力のモデル化試論、片岡邦好・池田佳子編『コミュニケーション能力の諸相』ひつじ書房、査読無、2013、29-51
② 渋谷勝己、接触言語学、日本語学 30-14、査読無、2011、244-255
③ 渋谷勝己、〈書評紹介〉Mufwene, Salikoko S. *Language Evolution: Contact, Competition and Change.*、言語研究 139、日本言語学会、査読有、2011、145-156.
④ 渋谷勝己、移民言語研究の潮流－日系人日本語変種の言語生態論的研究に向けて－、待兼山論叢 文化動態論篇 44、査読無、2010、1-22
⑤ 工藤真由美・白岩広行、ボリビアの沖縄系移民社会における日本語の実態、日本語学 29-1、査読無、2010、4-16
⑥ 日比谷潤子・高木千恵、日系カナダ人の日本語、日本語学 29-1、査読無、2010、18-27

〔学会発表〕(計２件)

① 工藤真由美・林明子・Viktoria Eschbach-Szabo、Japanischer Bilingualismus im Ausland (在外社会の日本語とバイリンガリズム)、Deutschsprachiger Japanologentag、2012.8.28、Universitat Zurich、スイス
② 高木千恵、鈴木七郎編『海外第二世の綴方集』にみる日系カナダ人二世児童の日本語、第 142 回変異理論研究会、2011.4.23、奈良大学

〔その他〕

本プロジェクトのホームページを作成し、研究代表者のホームページのトップページ(http://www.let.osaka-u.ac.jp/~sbj/index.htm)にリンクして、データと研究成果報告書を公開する予定である。

６．研究組織

(1)研究代表者

渋谷　勝己(SHIBUYA　KATSUMI)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90206152

(2)研究分担者
工藤　真由美（KUDO　MAYUMI）
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30186415
高木　千恵（TAKAGI　CHIE）
大阪大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50454591

(3)研究協力者
白岩　広行（SHIRAIWA　HIROYUKI）
大阪大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：30625025